「母の願い」　　2017 年 07 月 05 日

マタイ福音書 20 章 20 節～28 節　そのとき、ゼベダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、願いを持ってひれ伏し、何かを願おうとした。イエスが、「何が望みか」と言われると、彼女は言った。「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください。」イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」二人が、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に許されるのだ。」ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

主イエスは、三度目の十字架の死と復活の予告をされた。「そのとき」と書かれているから、直後であろう、ゼベタイの息子たちの母が、二人の息子と一緒に主イエスの所に来て、「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください」と願い出た。ゼベダイの息子たちはヤコブとヨハネである。マタイ福音書は二人の名前を書いていないが、マルコ福音書は二人の兄弟が直接、願い出たと書いている。事実は、母ではなく、二人の兄弟が申し出たのであろう。母が出て来る場面ではない。使徒職の権威を損なわないように、マタイ福音書は名前を伏せている。先ほど、十字架と復活を予告されたばかりであるが、彼らは聞く耳がなく、野心満々で、高い地位を要求したのである。ゼベダイ家は、ペトロのような家族内でする漁夫ではなく、雇い人のいる網主であった。主イエスが王座に着いた時は、他の弟子たちに比べれば、自分たち兄弟が高い地位を与えられることは当然であるという高慢さがあった。主イエスは、「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか」と言われた。「杯」について、エレミヤ書 49 章 12 節で、「わたしの怒りの杯を、飲まなくてもよい者すら飲まされるのに、お前が罰を受けずに済むだろうか。そうはいかない。必ず罰せられ、必ず飲まねばならない」と書かれている。「杯」は、神から与えられる苦難である。主イエスにとっては、十字架の死を意味している。兄弟たちは高い地位が得られるならば、どんな苦労も厭わない覚悟で、「できます」と、断言した。主イエスは、「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に許されるのだ」と言われた。ヤコブ、ヨハネ兄弟は、主イエスが飲んだ苦い杯を飲むことになる。それは、福音宣教のために苦難を負うということである。事実、ヤコブは領主ヘロデによって剣で殺され、使徒たちの中で、最初の殉教者になった。復活の主イエスに出会ってからは、地上的野心を満たすための杯ではなく、

福音宣教のために、苦難の杯を確かに飲んだのである。しかし、主イエスの右、左に誰が座るかは、主イエスの決めることではなく、神が定められた人に許されることであると語っている。

他の 10 人の弟子たちも毅然とエルサレムに向かう主イエスを見て、ローマ帝国から解放し、主イエスは王になられる日は近いと期待した。ヤコブとヨハネが自分たちを出し抜いて、主イエスに高い地位を約束してほしいと要求する会話を聞いて、兄弟たちの身勝手さに腹を立てた。他の弟子たちも皆、虎視眈々と高い地位を狙っていたのである。十字架の死と復活については、全く理解せず、この世的な野心を持っていたということである。聞く耳を持たない弟子たちに、どんなにか悲しい思いをしたことであろうか。しかし、忍耐されながら、弟子たちを呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

この言葉は、主イエスが弟子たちに最も諭したいことであり、また、ご自身の使命であった。ローマ帝国の支配者たちは力を用いて民の上に君臨し、権威ある宗教家たちは権力を振るって民衆を支配している。しかし、主イエスに従う者の間では、そうであってはならない。偉くなりたい者は仕える人になり、一番上になりたい者は、人々の僕になりなさい。主イエスが神から遣わされたのは、ご自分の命を身代金として献げ、罪の赦しの救いを与えるためである。主イエスは苦しめられ死んで、人々を救いに導く。どん底に下る私に倣う者であれと語られた。人は誰でも、僕として人に仕えることはしたくない、少しでも上に立ちたいと願っている。主イエスは、真逆を生きよと諭されたのである。これに、応答できる人は限られるであろう。

パウロは、主イエスに倣い、ガラテヤ書 5 章 13 節、14 節で、「兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によって全うされるからです」と書いている。主イエスの十字架によって、罪赦された者として、自由を得ている。神から愛され、侵すことのできない人権を付与され、主体性を持つ人として自由にされたということである。この自由は、自分本意の放縦な生き方ではなく、「隣人を自分のように愛しなさい」という律法を全うし、愛によって互いに仕え合う。パウロの信仰と実践の根幹になった言葉である。

宗教改革者マルチン・ルターは『キリスト者の自由について』の冒頭で下記のように書いている。「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって、何人にも従属しない。キリスト者はすべてのものに奉仕する僕であって、何人にも従属する。」パウロの書いた「自由と愛」を「自由な君主と奉仕する僕」という言葉で言い表している。

クリスチャンは、主イエスの十字架を見つめる。私のために死んで、罪の赦しという「生の絶対的是認」を与えてくださった十字架の救いを喜び、感謝して、他に仕える者となる。他に仕え、苦難を負う時、復活の確かな命が得られる。それが、主イエスにあって、生きるということである。